

研究課題 (テーマ)		助産師が実践するいのちの教育プログラムの開発	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	教授	松井 弘美
分担者	看護学部	准教授	工藤 里香
	看護学部	講師	村田 美代子
	看護学部	講師	小林 絵里子
	富山県助産師会	会長	田中 美智子
	魚津市教育委員会	主査	石崎 有希子
	氷見市健康課	保健師	南 寛子
	女性クリニック WeTOYAMA	医師	鮫島 梓
研究結果の概要			
<p>児童生徒による重大な問題行動の発生から、学校教育では命を大切にする教育の充実を重要課題の一つとして現在まで取り組まれてきた。いのちの教育の問題として、教育の実践方法が十分に確立されていないことが挙げられる。助産師によるいのちの教育においても統一された教育プログラムはなく、教育内容は助産師の力量に委ねられている。また、いのちの教育を通し、子どもたちがどのようにいのちの大切さを学び、そこから種々の社会問題に対処し得るのかも明らかになっていない。そこで本研究は、現行の助産師によるいのちの教育後の児童生徒の学びを明らかにし、それを踏まえ助産師が実践するいのちの教育プログラムの開発を目的とした。</p> <p>研究協力機関である 2 行政機関が保有している既に匿名化された助産師のいのちの教育後の児童生徒の感想文をテキストマイニング法により分析した。</p> <p>クラスター分析および抽出されたクラスターと教育内容の同時布置図の結果より、小学生においては、乳児と触れ合う体験からの学びが中心となり、自分の命の大切さを実感していた。乳児を見る、乳児の泣き声を聞く、乳児を抱きその重さに驚くなど、見る、聞く、触れるという身体を通しての五感が学びの出発点となっていることが示唆された。</p> <p>中学生においては、乳児と触れ合う体験から、自分のみならず他者を含めた命の大切さを実感し、ライフプランを作成することにより自分の将来を思考し、人生を時間的側面も含めて考えることでいのちの大切さを実感していた。</p> <p>また、いのちの教育を通して小学生、中学生は共に「驚いた」や「嬉しい」など、感情の動きがあることから、いのちに関する学びへの動機づけとなっていることが示唆された。</p> <p>本研究の結果は、今後、国際学会、学術誌において成果を発表する予定である。</p> <p>最後に、本研究にご協力いただきました行政機関の皆様に感謝申し上げます。</p>			
今後の展開			
<p>児童生徒の学びは感情・思考のレベルであった。命の教育には考えや気持ちを伝える、生活上の問題を解決するなど行動レベルでの成果が提示されていることより、小学生、中学生の学びを踏まえ、次のステップに移行できる具体的教育方法を組み込んだ教育プログラムを作成する。</p>			